

歌物語 大和物語 鳥飼の院 (自習プリント)

文法・重要語の確認

1 次の空欄に入るように傍線部の意味を答えなさい。

(1) 鳥飼の院におはしましにけり。

訳 鳥飼の院に「 」。。

(2) うかれめども、あまた参りて候ふなかに、

訳 遊女たちが、たくさん「 」。なかに、

(3) 上に召しあげ給ふ。

訳 御前に「 」。。

(4) 酔ひ泣きいとになくす。

訳 たいそう「 」。酔い泣きをする。

2 次の傍線部の助動詞の文法的意味を答えなさい。

(1) 問はせ給ふに、

(2) みなみな人々に詠ませ給ひにけり。

3 次の漢字の読みを現代仮名遣いで答えなさい。

(1) 袴 (2) 上達部 (3) 皇子

文脈を理解する

1 「御遊び」とは何か。最も適当なものを、次から選びなさい

ア 鷹狩 イ 管弦

ウ 言葉遊び エ 蹴鞠

2 「このわたり」の「こ」は何を指しているか。次の空欄に、本文中から適当な言葉を抜き出して入れなさい。

「 」のあたり。

3 「声おもしろく、よしあるものは侍りや」を現代語訳しなさい。

4 「そもそもまことか」とあるが、どのようなことに対して「まことか」と尋ねたのか。説明しなさい。

5 ①「仰せ給ふやう」、②「承りて」の主語をそれぞれ答えなさい。

6 「鳥飼といふ題をよくつかうまつりたらむにしたがひて」の解釈として最も適当なものを、次から選びなさい。

ア 鳥飼という題の意味を深く理解していることが判明したならば

イ 鳥飼という題にふさわしい和歌を巧みに詠みおおせたならば

ウ 鳥飼という題の歌を帝に詠んでさし上げることができたならば

エ 鳥飼という題を出した私の真意に気づくことができたならば

オ 鳥飼という題にとらわれずに自由な発想を展開したならば

7 「これに物脱ぎて取らせざらむ者は、座より立ちね」を、「これ」の内容を明らかにして現代語訳しなさい。

主題を考える

8 「あさみどり…」の歌について、

(1) 「かひある春にあひぬれば」の解釈として、最も適当なものを、次から選びなさい。

ア 生きていた甲斐があったと思うほどに、美しい春を迎えた。

イ 生きていることの喜びを感じさせられるような、立派な帝が春を迎えられた。

ウ 帝が春の盛りのように栄華をきわめられている、素晴らしいときを迎えた。

エ 帝に召され和歌を詠むという光栄に、生きている甲斐があったと思える春を迎えた。

(2) 「たちのぼりけり」とは具体的にどのようなことを意味するか。最も適当なものを、次から選びなさい。

ア 帝に拝謁するうれしさで天にもものぼる心地がすること。

イ 帝を祝福するために人々が宮中に参上したこと。

ウ 帝の恩寵を受けて殿上に召し上げられたこと。

エ 帝を誇りに思う人々が天にもものぼる心地でいること。

(3) どのような点で「鳥飼といふ題」と言えるか。説明しなさい。

解答

【文法・重要語の確認】

- 1 (1) いらつしやつた
(2) 参上して控えている
(3) 召し上げなさる
(4) この上もなく
- 2 (1) 尊敬
(2) 使役
- 3 (1) はかま
(2) かんだちめ
(3) みこ

【読解問題】

- 1 イ
- 2 鳥飼の院
- 3 声が美しく、いわれのある者は控えておるか
- 4 そこにいる美しい「うかれめ」が大江山玉淵の娘であるということ。
- 5 ① 亭子の帝〔帝〕 ② 玉淵の娘
- 6 イ
- 7 玉淵の娘に着物を脱いで与えないような者は、この席から立ち去ってしまえ。
- 8 (1) エ (2) ウ

(3) 「あさみどりかひある春に」の部分に「とりかひ」という言葉が詠み込まれている点。

【現代語訳】

亭子の帝が、鳥飼の院にいらっしやった。いつものように、管弦のお遊びがある。「このあたりの遊女たちが、たくさん参上して控えているなかに、声が美しく、いわれのある者は控えておるか。」と（帝が）お尋ねになると、遊女たちが申し上げることには、「大江玉淵の娘と申す者が、めずらしく参上して控えております。」と申し上げたので、ご覧になると、姿や容貌も美しく見えたので、（帝は）しみじみと感動なさって、御前に召し上げなさる。「そもそも、（玉淵の娘だというのは）本当か。」などとお尋ねになる、その時に、「鳥飼」という歌題で、そこにいる人たち皆に歌を詠ませなされた。（帝が）おっしやることには、「玉淵は何ごとにも熟練していて、歌なども上手に詠んだ。この鳥飼という題で上手に詠んだなら、それによって、（お前を玉淵の）本当の子と認めよう。」とおっしやった。（娘は）承って、すぐに、

浅緑色に美しくかすむ、生き甲斐を感じさせる春に出会ったので、霞ではないけれど、霞が立ちのぼるように、私はこの御殿に上ったことですよ。

と詠む、そのときに、帝は声をあげて感心なさって、涙をお流しになる。人々も十分に酔っているときで、たいそうこの上もなく酔い泣きをする。帝は、御桂一かさねと、袴をお与えになる。「ここにいてすべての上達部、皇子たち、四位・五位の者で、この娘に着物を脱いで与えないような者は、この席から立ち去ってしまえ。」とおっしやったので、片端から（順に）、身分が上の者も下の者も皆（褒美として着物を娘の）肩にかけたので、（娘は）肩にかけきれずに、（着物を）二間ほどに積み上げて置いたそ
うだ。